

国語科学習指導案

広島市立〇〇小学校
教諭 〇〇 〇〇

- 1 日時 平成19年9月〇日(〇)
- 2 学年・組 第6学年〇組
- 3 単元名 百年後の未来予測をし、未来予測Bookをつくろう
「百年前の未来予測」

4 単元について

○ (児童観)

本学級では、日常的な活動として朝の会のスピーチや日記指導、読書ノート(読書の記録)を継続し、言語活動が活発化するように環境を整えている。空いた時間には本を読み静かに待っている姿勢も身に付きつつあるが、自分の考えを持たずに、あるいは、考えの広まりに気付かず本を読み終えたりしている実態もあり、読書ノートの内容に深まりが見られない児童もいる。

児童は、6月の「イースター島にはなぜ森林がないのか」の学習の際に、文章の構成について知り、その構成を真似しながら環境問題に関する説明的文章を書いた。問いかけの文を取り入れ、それに対する答え(事例)を書き、最後にまとめとして自分の意見・考えを書く型を取り入れるとスムーズに文章を書くことができることを実感することができた。また、文末表現の学習(「わざわざ表現」・筆者の強調)をしたので、実際にそれらを取り入れて書いてみる練習も兼ねることができた。その結果、相手に自分の伝えたいことを伝え、さらに友だちの考えを聞き、かかわりができたことを喜んでいる姿が見られた。つなぎ言葉も意識し始めてきた。7月は「ヒロシマのうた」を分担して暗唱して読みを深め、主題をとらえて人間の生きる姿について考えた。さらに「人間の生き方」「人間と戦争(平和)」などのテーマで本を読み広げ、感想文にまとめ交流会を行った。また、「しょうかい文を書こう」では、4月から7月に自分ができるようになったことやがんばったことを詳しく書く練習をした。その際は、ナンバリングの技法を取り入れている。

これらの、実際に文章を書いてみるという学習を通して、目的をもって教材文を読み、自分の文章に筆者の技法を生かしたり、書くことによって読みを深めたりすることができた児童もいる。しかし、依然として言葉に着目して読みを深め、自分の考えを持っていない児童もおり、書く活動においても、自分の思いを表現しきれない状態のままである。

この後は、「宮沢賢治」を学習して登場人物の生き方を深く読みとり、ポスターセッション用のポスターにまとめたり、「言葉の意味を追って」文章を読んで辞典を作ったりするという言語活動に取り組み、教材文の読みを書く活動に生かし、抵抗なく文章が書けるようにしていきたい。

○ (単元観)

本単元は、文章の内容から筆者の考えを読み取り、「未来」についての自分の考えを持って文章に書き表すことをねらいとして、言語活動に「未来予測Book」づくりを設定した。児童一人一人は、分野ごとまとめていく「未来予測Book」の原稿執筆者となる。自分の考えを明確にし、根拠や理由を添えて予測し、相手に納得してもらおう文章を書くことで、相手を意識して書く力を付けていくことができるであろう。

教材文は、本活動への導入の役割を果たしているが、単に児童の興味・関心を高めるためだけでなく、未来予測のために決して忘れてはならない重要なポイントを示唆する役割、つまり、未来予測のための手引き的な役割を果たしている。根拠となる事実に基づかない児童の未来予測は、現実味のない空想の世界になりかねない。児童が、何のために未来を予測し書くのか、その

ことが自分たちの生活や生き方にどう結びつくのかといった目的意識を持って言語活動に臨めるようにしていきたい。なぜ今、未来を予測する必要があるのかを児童が認識できるように教材文を取り扱っていかなくてはならないと考える。

また、教材文は、自分が実際に書く時の「型」としての手引き的な役割も果たしている。「読むこと」で理解した文章構成を、「書くこと」に応用するのである。さらに、筆者が使っている文末表現（わざわざ表現・あこがれ表現など）を取り入れて書いてみるようにする。つまり、筆者の表現上の工夫に気付き、それを自分の文章に生かしていくのである。このようにして児童は、「型」通りに表現することを通してスムーズに文章が書けることを体験していく。そして、実際に書く活動を通して、論理的な思考力や表現力を身に付けていくことができるものと考えられる。

日常生活における言語活動においても、話の組み立ての工夫は最も重要な要素である。つまり、根拠が明らかな、説得力のある話し方や文章が求められている。そのためには、組み立てや内容をよく練ることが大切になってくる。自分の考えを深め広げ、伝えていく学習経験としての位置付けも大きいと考える。

これまで「読みの授業」は受信活動が中心だった。教材文を黙読し、語句の説明を聞き、先生と一部の生徒とが主人公の心情を熱心に追求するのを、大部分の児童・生徒は聞くだけであった。このような「受信型の読みの授業」では、教材は「りっぱな文章」で、教師は「読みのすべてを知っている解説者」で、児童・生徒は常に「教えてもらう人」となる。これに対して、「発信型の読みの授業」では、教材は「学習のための文章」で、教師は「児童・生徒の考えをスムーズに導く人」で、児童・生徒は「発信する人」となるのである。

これまで「発信」というと、作文や音声言語で行う活動だという意識があった。それに対して、本書は「読み」の授業でも「発信」の力を育成しようと主張するものである。

『「発信型の読みの授業」を提案する』 市毛勝雄編著 明治図書(2002) より

○（指導観）

指導にあたっては、まず、ワークシートを用いながら教材文の読みを深めていきたい。そして、次のことに気付くようにしたい。

- ・ 多くの予測が的中した理由は、当時発展途中にあった科学技術を根拠としていたからであるということ。
- ・ 科学技術の進歩の結果がすべてよかったわけではないことから、未来を予測するには利点と問題点の二つの側面を考える必要があること。
- ・ 筆者は文章構成を整え、強調表現など、表現に関しても様々な工夫をしていること。

その上で、自分たちの生活状況に意識を向け、実際に自分たちも未来予測をしていく。その際も、読み取りの時と同じような形式のワークシートを用い、自分の考えを整理していけるようにする。教材文の内容の読み取りを深め、筆者の表現技術も学び、その上で自分の考えを書くことで、積極的にBookづくりに参加することができるようにしていきたいと考える。

原稿の作成に当たっては、その過程で、モデル原稿を基に上記の視点で話し合うことを通して、各自の原稿の修正の見通しをもたせる。また、「アドバイスカード」で感想の交流も行う。

単元の最後には、分野ごとに出来上がった「未来予測Book」をお互いに読み合い、感想交流会を行う。それは、友だちの考えを知るよい機会になると考えている。また、共通の視点をもってお互いの表現技術のよさを認め合うことで、今後の活動への意欲にも繋がるであろう。児童の手元には成果物（Book）も残ることとなり、満足感を得られるのではないかと考える。

多様な視点や考えを出し合うことのよさを学ぶとともに、一人一人の児童が、未来への展望をもてるような学習を行っていききたいと思う。

5 単元の目標

- 事実と感想や意見との関連をとらえながら文章の内容と筆者の考えを読み取ることができる。
(読むこと エ)
- 未来の生活について予測し、自分の考えと根拠を明確にして書くことができる。(書くこと ウ)

6 単元の評価規準

国語への関心・ 意欲・態度	読む能力	書く能力	言語についての知識・ 理解・技能
○ 未来について、予測したり考えたりしたことを、教材文の「型」を意識して書こうとしている。	○ 事実と感想や意見との関連をとらえながら、未来予測記事の内容と筆者の考えをつかんでいる。	○ 未来の生活について、自分の考えと根拠を明確にして「未来予測 Book」の原稿を書いている。	○ 事実と感想や意見の違いを示す言葉を理解している。 ○ 自分の意見をわかりやすく伝えるための構成等を理解している。

7 単元の学習と評価の計画

次・時	学 習 活 動	評価の観点				評価規準 (評価方法)	
		関・意・態	読むこと	書くこと	言語事項		
1 次	1 時	教材文を通読し、感想を発表し合う。 単元全体の概略をつかみ、学習の見通しを持つ。		○			教材文の話題に興味を持ち、進んで内容を読もうとしている。 (ワークシート)
2 次	2 時	教材文を通読し、未来予測記事について読み取る事項をつかむ。			○		教材文のポイントとなる項目名を見つけて読み進めている。 (ワークシート)
	3 時	メモした項目名を手がかりに、紹介された未来予測記事の内容を読み取る。			○		未来予測記事について説明されていることを読み取っている。 (ワークシート)

4時	未来予測が的中した理由として筆者が述べていることや、筆者が訴えていることを読み取る。 筆者の考えに対する自分の考えをまとめる。	○			事実と感想・意見との関係に注意しながら筆者の考えを読み取っている。 (ワークシート)
	教材文を通読し、表現の工夫を読み取る。			○	筆者の意図をとらえながら読み進め、表現の工夫をとらえている。 (ワークシート)
3次	6時 未来予測をする分野を決め、それぞれの分野について、資料をもとに調べる。	○			自分が選択した分野について、資料を手がかりに未来予測をしようとしている。 (ワークシート)
	7・8時 前時に考えた予測の中から関心のある分野を選び、「未来予測Book」づくりのための原稿を書く。 (本時)			○	未来の生活について予測し、自分の考えと根拠を明確にしながらか原稿にまとめている。 (原稿, 評価カード)
4次	9時 同じ分野ごとにグループを作り、一冊の本にまとめる。	○			グループで話し合い、計画的にまとめようとしている。 (行動観察)
5次	10時 お互いの「未来予測Book」を読み合い、感想を交流する。	○			発表内容や方法を意欲的に振り返ろうとしている。 (行動観察・振り返りカード)

* 準備物

ワークシート, 評価カード, 振り返りカード

8 本時の目標

○ 未来の生活について予測し、自分の考えと根拠を明確にしながらか原稿にまとめることができる。

9 本時の学習展開

学 習 活 動	指導上の留意事項	評価規準 (評価方法)
1 前時までの学習を想起する。	○ 筆者の意見や筆者の問題提起を思い起こすために教材文を読む。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>自分たちの未来について予測したことを文章で書き表し、まとめてみましょう。</p> </div>		

<p>2 一つ原稿をモデルとして話し合う。</p>	<p>○ 話し合う視点を提示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予測する進歩が生み出す利点だけでなく、問題点にも触れているか。 ・根拠や例が書かれているか。 ・予測に対する自分の考えや希望が書かれているか。 ・文章構成が考えられているか。 ・文末表現が効果的に使われているか。 	
<p>3 話し合いをもとに自分の文章を読み直して修正し、自分の考えを深めていく。</p>	<p>○ Cの児童が、未来の生活について具体的に予測することができるように分野ごとに題材を用意しておく。モデルの原稿の中から根拠や理由が書かれている部分を見つけて読む場を設ける。</p> <p>○ Bの児童が、未来の生活について筆者の意図を生かして、よい点だけでなく問題点にも触れながら、根拠や例を挙げてまとめることができるように、教材文を振り返る場を設ける。筆者の意図は掲示しておく。</p>	<p><A：十分満足できる> 未来の生活について分野ごとに予測をし、筆者の意図を生かして、よい点だけでなく、問題点にも触れながら、根拠や例を挙げてまとめている。</p> <p><B：概ね満足できる> 未来の生活について予測したことを、根拠や理由を挙げながらまとめている。 (ワークシート)</p>
<p>4 原稿を読み合い感想や考えを交流する。</p>	<p>○ 自分が書いた内容が相手に正しく伝わるかどうかという観点でお互いの原稿を読むように助言する。</p>	
<p>5 単元のまとめとして、「未来予測Book」を製本することを知らせる。</p>	<p>○ 製本に対する興味・関心が高まるように成果物を準備する。</p>	

*準備物 評価カード, 原稿